極めて稀な事柄

小林　一郎
熊本大学大学院教授

「錦帯橋は，極めて稀な事柄の結果として存在している」と思っている．

まずは，1600(慶長5)年の関ヶ原合戦以後の地政学の結果である．川が町を横切るように町割りをしたのは，平時の暮らしよりも，次に必ずやってくるはずの大合戦の防御態勢を重視したからだ．**図-1**を見ればわかるが，舌状台地が毅然と北東方向に突き出し，山陽道を迫りくる東軍をこの地で受け止めることを天下に示している．数か月持ちこたえれば，萩だけでなく，西国各地から援軍がはせ参じるに違いない．錦見を捨て籠城するためには，橋はむしろ，壊れやすい方がよかったはずだ．しかし，歴史はそのようには動かなかった．

次の結果は，1673(延宝元)年における岩国武士団の普請と作事の技術の高さにある．世はすでに，徳川三代将軍家光の時代である．可能であれば，平時の城に移住すべきであった．戦国時代末期防御に優れた月山富田城から米子城へ移ろうとしたのは，ほかならぬ吉川氏であった．城の機能のすべてを知り尽くしていたはずだ．しかし，藩ですらなくなっていた岩国では，戦時の城をそのまま，平時の町として運営していくしかなかった．

城が壊されてなお，その地にとどまるしかなかった人々にとって，川を挟んだ二つの町をつなぐことの意味とは，どんなものなのだろうか．しかも橋は決して，誰でもが自由に渡ることを許されるものではない．「流されない橋」の意味は，深く重い．そして，その難問に，見事にこたえたのが，護岸と河床を固め，石造りの橋脚の上に置かれた3連の反橋と両岸の柱橋からなる構造である．単に木造部分があれば流されない橋が実現するわけではない．全体として一つの構造なのだ．この状況をみれば，錦帯橋が世界に一つしかないものであることは，ほぼ明らかであろう．

さて2008(平成20)年1月に第1回錦帯橋国際シンポジウムが岩国で開催され，錦帯橋の真正性に関する議論がなされた．その時，海外の専門家から錦帯橋に関するいくつかの宿題が出された．①世界橋梁史の中での位置づけ，②日本および東南アジアの木造建築史の中での位置づけ，③地域の歴史，特に武士が建設した経緯と橋自体の歴史などであった．

「錦帯橋世界文化遺産専門委員会(委員長：小林一郎)」は，上記の宿題を解決するために，各分野の専門委員に依頼し，欧州，中国への文献および現地橋梁調査，木造技術からみた錦帯橋の特徴の分析，アーチ構造の力学的な解析等々の課題の解明を行ってきた．本書は，上記のような調査の一段落をまとめたものである．川と町の成り立ちから始まり，橋自体の歴史，木造建築学，橋梁工学など，さまざま観点から，この稀有の橋を分析している．さらに，欧州，中国，日本の各地域での，木橋の建設の歴史もまとめた．大きく木造アーチ橋に分類されるものは，欧州にも多く存在することも分かった．中国の虹橋もアーチに分類することもできるかもしれない．しかし，錦帯橋式アーチ構造としか呼びようのない，特別な形式は世界に一つしかないと結論づけて良いようである．本書はさらに，平成の架替の概要も記録として掲載している．

最後に本書は，世界に錦帯橋の価値の重要性を訴えるものでもある．**図-2**の世界地図を見て欲しい．小さな都市の大きな挑戦である．本書の完成を最初のステップとし，岩国から大きな世界へ飛び出して行きたい．このような取組自体が，平成の日本における「極めて稀な事柄」なのである．

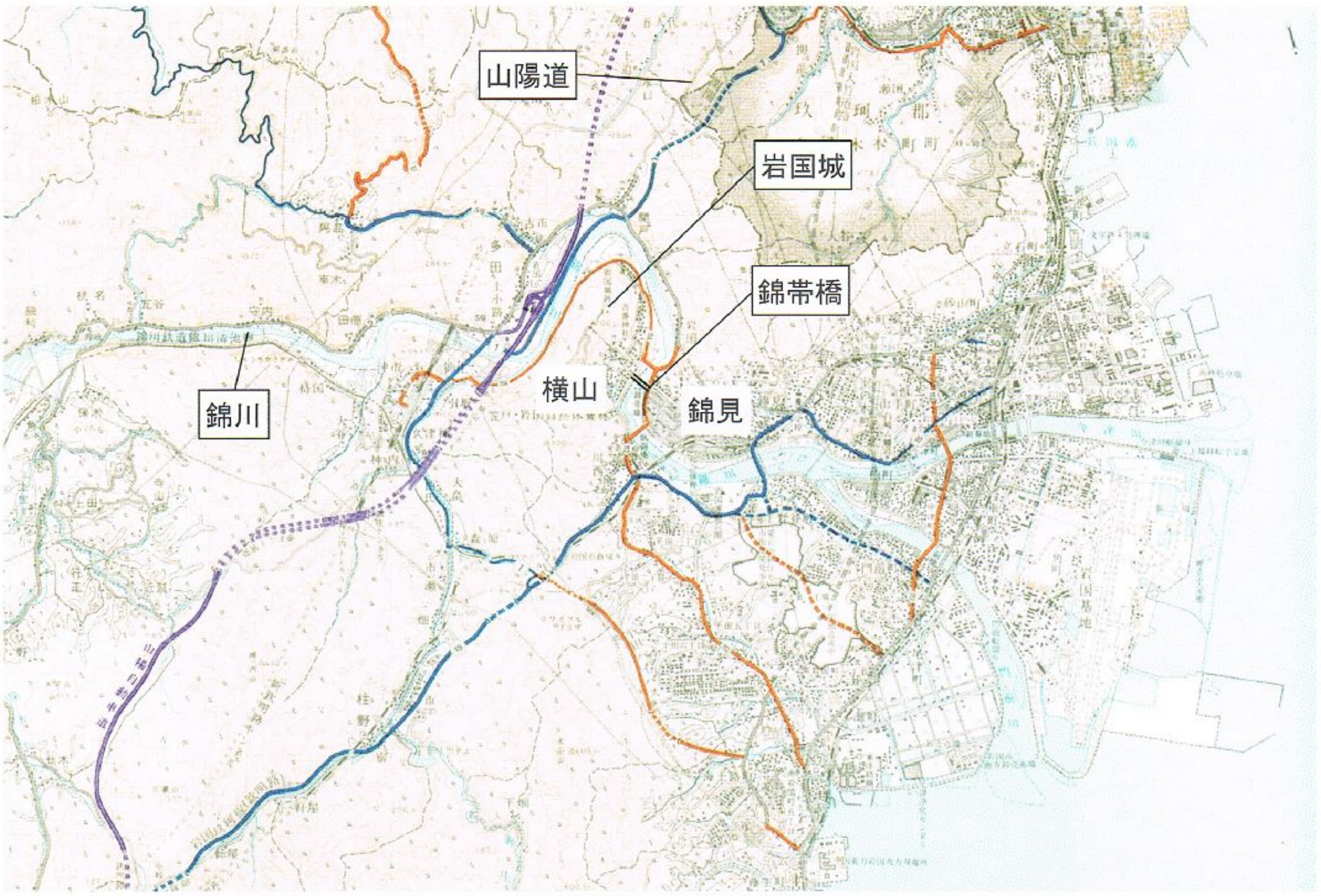

図-1　岩国市管内図(山口県岩国市役所，2006)

図-2　世界の中の岩国

ライトに映える逆さ五橋（筧良一郎氏撮影）

究極の名橋　錦帯橋
錦帯橋世界文化遺産専門委員会
発行　平成２５年３月
岩国市錦帯橋世界遺産推進室
岩国市今津町１－１４－５１
電話　０８２７－２９－５１１６